

友人の恐怖

丸山弘子

年金を受け取っている信用金庫の、行事でもあり客へのサービスで、毎年二回（初夏と秋）寄席の案内がある。二人分申込めるので、一人は自分、もう一人分は親しくしている友人を誘っている。この信用金庫と取引がなくてもよいそうなので、この人は他区の人である。会費五百円、お土産付なので、取引のない私は申訳ないわ、と友人はいつも言っている。

ことしもつい先日、秋の分の案内が来た。早速連絡をすると勿論OK。

当日のことは毎年のことなので、友人も心得たもので、待ち合せの場所も時間も、いつものところにきまつている。そこで食事をすませ会場に行くのである。

前もって電話連絡はしてあったが、その日いつものように待っているのに、友人があらわれないう。時間にルーズな人ではないので、何かあったのでは、と心配になってきた。

今までこんなことは一度もなかったもので、私は連絡先の電話番号を持って来てないし、ケイタイも使わないので、近くの自分の家に一度帰ることにした。

そして、まさかと思いがら友人宅へ電話をかけた。すると、いつものように本人が、すまして「モシモシ」と出たではないか。

「待っているんだけど。忘れちゃったかな」と言うと、とび上がらんばかりの様子で驚いている。どうするか聞くと、これから行くから待ってて、と言う。時間的には、食事をしようと思っていたので、その分のゆとりはある。友人の家から会場まで、すれすれで間に合うかちよつと遅れるくらいである。こちらでも覚悟をきめて、会場で待つことにした。

帰り、早めの夕食の時、友人が言った。

「いよいよ認知症になってきたんだわ、私」と、落込んでしまっている。ほがらかにしていたけれど、落語を聞いている間、そのことを考えていたにちがいない。

「一回そんなことがあったって、認知症とはいえないでしょ」と言っても、

「でも前にも言ったことがあると思うけど、私の家、家系的にはそうなるのよ。父が長い間ボンヤリしていたし、今回、弟が完全に認知症だと診断されてしまったでしょう。恐いわ」

どのように力づけなければいいのだろう。私だって不安はあるのだから。でも最後は元気になって、又会いましょう、誘ってね、と言って帰っていった。